

## フョイエルバッハの会通信 第102号

### 〈書誌情報〉

川本 隆『初期フョイエルバッハの理性と神秘』知泉書館、2017年1月

本紙でもすでに紹介のあった著者の学位論文が公刊されたもの。

序 論

第1章 『理性論』の汎理性主義

第2章 『死と不死』における「自然」の位置

第3章 唯物論的・人間学的転回の意味——哲学と宗教との関係

付 論 フョイエルバッハにとっての〈神秘的なもの〉

「筆者はけっして観念論を再興しようとしているわけではない。しかし、フョイエルバッハの唯物論的・人間学的転回の重要性をみきわめるためには、当時の神学論争状況と彼の思弁的な問題意識の吟味・検討、初期フョイエルバッハのテキストの精読がぜひとも必要だと考える。本書は、初期フョイエルバッハを見なおすためのささやかな一歩にすぎないが、魅力的なフョイエルバッハ像の再構築に少しでも貢献できれば、幸いである。」（「はじめに」より）

津田雅夫『「もの」と「疎外」』文理閣、2017年2月

第一章 〈疎外〉について

第二章 「もの」再説

第三章 「本来性」について

第四章 「もののあはれ」について

第五章 「疎外」と「無」

補遺

2011年に公刊された『「もの」の思想——その思想史的考察』の続篇。第三章に「(五)フョイエルバッハの宗教批判」という節があり、「フョイエルバッハが、最終的に辿り着いた見解は、宗教とはプロセスであって、なにか固定した『本質』なるものがあるわけではないということであった。すなわち、宗教は現実の生活過程のうちに改めて差し戻されなければならない。」「フョイエルバッハが出した回答は、『生活の技(Kunst des Lebens)』として宗教を捉えることであった。」(68頁)と述べられている。詳しくは本書をお読み下さい。

### 〈会員からのお便り〉

本紙前号で、川本隆氏より合評会開催の予告が出されましたが、対象文献筆者の服部氏との都合が合わず、開催延期となりました。これに関連して石塚正英氏より2月12日付でつぎのような提案が出されました。

「創立以来、もっとも熱心な研究者の一人であります川本さんがオリジナル本を刊行されました。これで、主だった創立メンバーは各自のフョイエルバッハ論を纏めたことにならないのでしょうか。私の手元にある文献を見ると、以下の通りです。

1991年石塚『フェティシズムの思想圏——ドブロス・フョイエルバッハ・マルクス』

1997年河上『フョイエルバッハと現代』

2008年河上『宗教批判と身体論——フョイエルバッハ中・後期思想の研究』

2014-16年柴田「フョイエルバッハの実践」シリーズ

2014年石塚『フェティシズム——通奏低音』

2015年服部『四人のカールとフョイエルバッハ』

2017年川本『初期フョイエルバッハの理性と神秘』

この際、服部単著の合評会でなく、上記の活動を前提とする討論会を目指すのはどうでしょうか。今年は、国際フョイエルバッハ協会設立30周年でもありますので。」

~~~~~

## 翻訳：フリードリヒ・フォイエルバッハ『私の宗教生活の思い出』

柴田隆行

原典：フリードリヒ・フォイエルバッハ「私の宗教生活の思い出」

Friedrich Feuerbach, Erinnerung aus meinem religiösen Leben. Zürich und Winterthur 1843.

私の魂にこれまで以上に生き活きと浮かんでくるある時代の思い出がある。それは、ある聖職者が行った堅信の授業であるが、この人は宗教と徳に関して青年たちのところをつかむ勝れた才能と極めて人間的な真面目さとを一身に兼ね備えた人だった。

私は最大の知識欲と真理愛をもってこの授業に臨んだ。だが、その意図通りの効果——福音信仰の強化を、私に与えることはなかった。どうしてそうなったか。

少年時代の私を知るすべての人が証言するように、私は非常に早くから宗教に対し並外れた感受性を示していた。だが、私は、この世界を創造し維持する本質〔存在者〕をそうすぐには思い浮かべることができなかったことを私自身よく覚えている。それは、真に率直な心をもって私と私の家族の幸福を祈り、その本質から受けたと信じる善行をその本質に感謝しえたときでさえ、そうだった。

神の父なる善と全能という表象は、私の最も初期の信心の唯一のエレメントであり、それらは互いに補強し合っていた。そもそも善のない全能の本質など私にとって何だったろうか。そんなものは私に恐怖しか与えなかった。また、私の願いを叶える最善の意志を持っていてもそれを実現する力を持たないような無限に善なる父とは私にとって何だったろうか。私が必要としたのは、すべてに善であると同時に全能の神であった。そのような神を信じるようにと私は教えられた。そういう神を信じ、自分の子どもじみた願望や心配や感謝の念を信心深くそういう神に伝えることは私には容易なことだった。

神から、と私は教えられた、あらゆる善は来る。善だけが来るのであって悪も来るわけではない、と。神は善を愛し悪を嫌う。これを私の子どもころの言葉で訳せば次のようになる。神から来るのは君が気に入ることだけであり、君の願いに反することや君を悲しませることは来ない。こうした表象は、神への私の愛や信頼をさらに高めるのにまったく適しているが、他面で、人間に対してより感じやすく反抗的で敵対的にするのも適している。もっぱら悪意や不機嫌から、さらには私自身の犯行への罰としてでさえ、私を悲しませる人は悪人であり、私と神に対する敵だった。したがって、私はじっさい愛する神に、自分をしばしば侮蔑するこのまったく悪辣で腐敗した世界のゆえに、つねにたっぷりと訴え愚痴をこぼさねばならなかった。

最後に、私にとってよりいっそう明確にされねばならなかったことは、私の両親と教師がいつも私に誓い報いたことが同時に神が望み報いた善であり、また、彼らが私を叱り罰することがまさに悪であり神の気に入らないことであるのはどうしてかということであった。善悪の認識への小さな前進は、しかし、神と人間への私の態度に大きな影響を与えるものとなった！

神の勘違いされた寵児にとっても似つかわしいこうした反抗的で尊大な本質がいまやどんどん消えていった。愛する神を私の友人として保持するために、私は今後人間に対してより従順でより好ましく振る舞わねばならないと信じた。いまや私は神への訴権ばかり持つことはなくなった。悪質で腐敗した世界は、私がふだんいつも神の前で非難したように、それなりに代表者を得ていた。しかも、その後原告として頻繁に神と私の間に割り込んで来る私自身の良心のなかに代表者を得ていた。神への自由で無制限な介入はもう終わった。私の良心という媒介者なしで、良きとりなしなしで、この時以来私は神に近づく必要がないと信じた。神はいまや無条件の善と能力者であることをやめた。それは、私が、公平な神、アベルとカインの神に、私がただ願い利用するだけでなく犠牲も捧げなければならなかった神に、私は気づき始めた。

それにもかかわらず、私にはいま一度、神との交わりが不可欠の必要事となった。そして、神と私との関係においても、私が必要を満たしても心配が混ざってくるのもめず

らしくなかったし、あるいは、私が自分に責があるのを知っている多くのことですぐに神を罰せず、自分の功績にした多くのことで神がすぐに報われるのも見ずに、神の正当性への疑念が混じってくるのもめずらしくなかった。だが他方で、神への私の信心がふたたびより燃え立ち熱心になったときがあった。それは、私の良き良心が私を神に推薦し、祈りの祝宴にいわば私を紹介するかのように見えたときであり、あるいは、私の犯行にもかかわらず罰の答を私に感じさせず、それどころか、ときには善行で報いることになる神の善についての表象が私の心のなかで支配的となったとき、私がヨブにおいてかの回復した人間とともにつぎのように讃美することができたとき、である。

「私は罪を犯し、正しいことを曲げた。

しかし私に報復はなかった。

彼は私の魂を墓から解放した。

そして私の命は光を喜んだ。」

(\*ヨブ記 XXXIII.27. 私が 12 歳のときすでに、詩編、ヨブ記、シラ書、知恵の書が私の最高の愛読書であった。)

〔新共同訳 「私は罪を犯し、正しいことを曲げた。それは私のなすべきことではなかった。しかし神は私の魂を滅亡から救い出された。私は命を得て光を仰ぐ。〕

こうして私は、神とつねに規則正しく関わって生きることがなくなった。ときに神は私に好意的で恵み深く、ときに神は私にとって邪悪であり、神に近づくのを私ははばかった。私は神とどうつきあったらよいか途方に暮れることもあった。また私の子どもじみた軽率で神をすっかり忘れることもしばしばあった。だが、私たちの別離はけっして長く続くものではなかった。沈静化させるか悦ばしい外的出来事が次いで起こればつねに確実に、軽率な者を熱中する神を思い起こさせたり、良心から不安になっている小さな罪人を愛に満ちた天の父と和解させ連れ戻したりすることに成功した。神は単純な子どもにとって厳父であり良き父であり、ときには不思議な父でもあった。だが、私にとって神が父でありまた父であり続けたのは、明らかに、私が三一性の説教を初めて聞くまでであり、神を父と子と聖霊というペルソナに分けてからふたたび一箇同一の本質である一神として表象するよう求められたとその説教を理解したときまでであった。

この要求は私にまったく悪印象を与えた。それは、私が今後、これまで尊敬していた神とは別の神を祈るべきだということと同じ意味を持っていた。

私が自分の肉親の父と同じように語った父なる神は、私のなかであまりに多くの形をとっていて、神をより多くのペルソナに分けよというこの要求が私の心に当然の反抗心を呼び起こさずにはいないほどのペルソナになっていた。私の精神は、分離したペルソナをふたたび一つに結合するという別の課題を解決しうるほどには発展していなかった。

私がこれまでもっぱら父として知り尊敬していた神と、子と聖霊と統一した神すなわち理解しがたい三一の神とは、私にとってまったく両立しえない二つのものであった。神を三つ以上のペルソナに分けてふたたび統一するよう私が要求されたら、たしかに神が信じられなくなるのと同じであろう。したがって、私にとって聖霊は、神の一つのペルソナとして具現されるかぎり、まずはまったく無意味な音響であり、私の想像力は主としてキリストに関わった。キリストを、ごく単純な子どものときには愛すべき子どもの天使として、のちには最も敬虔な人として、知りかつ愛することを私は学び、またさまざまな芸術作品で毎日自分の感性的な目に提示されていた。

キリストを私は、かつて地上に住んだ最も敬虔な人として前から知っていたし愛していた。苦しんでいる人間のためになされる彼の善行はなんと私を感動させたことか。悪人が彼に報いた忘恩はなんと私を怒らせたことか。自分の敵からの侮辱に耐えさせた彼の謙遜をどれほど私は感嘆したことか。

だが、経験豊かな悟性にとってイエスの生涯で不思議にもかつ超自然的に現象することがつねとなっていることを、少年は、旧約聖書ないしキリスト教ロマン主義的伝説圏の他の神人について語られる種類のすべてと同じく囚われない信仰をもって受け止めた。キリストの復活と昇天さえ、私が人間を死に必然的に従う本質としてまだ捉えていなかったかぎりにおいて、私に神と同等の超人間的な自然を予感させることはできなかった。だがキ

リストは、私には、かつて人間に貢献したすべての神人の最初の人であった。彼を私は驚嘆し愛したが、他の神人には驚嘆しただけだった。キリストが私に刻印した犠牲的な愛という事例で、私は最初に善を、賞罰を超える何ものかとして、それ自身だけで大きな意味をもつにちがいない何ものかとして――予感することを学んだ。私の天上の父である神自身が、私の表象のなかでますます、神のために子どもの想像力が讚美した人間性を洗い清め、キリストの人倫論つまりその生涯と働きが私にとってより感性に満ち意味に満ちたものとなるにつれて、若返り変容し神化した。人間であるキリストは、私にとって、神の像を私の目に最も美しく照らし出す鏡であった。ならば、私にとって神として説教されるキリストは何であったか。

キリストは、聖霊と同様、神として説教され、私の子どもじみた悟性にとってはもっぱら神と並ぶ神にすぎなかった。だが、私にとって私の天上の父の禁令は、すでに知られており、「私は主であり、汝の神である。汝は私と並べて他の神々を持ってはならぬ」というものだが、神として説教されるキリストは、私の悟性が神と並ぶ神としてしか指定しえず、私の心情に必然的に、従来私が知り尊敬していた神性のライバルという印象を与えた。

そうだ。だからキリストは、かつては人間としてとても愛しく――とても神聖と言える――だったが、それと同じ信条でいまや神として身の毛のよだつものとなった。まだ邪魔されない熱情をもって私の古い神に祈ることができるように、私はキリストを忘れねばならなかった。私の祈りは、神についての表象がそこに紛れ込むや否や、有毒となった。そこで私は、私の心の唯一の神への私の祈りを略奪として、禁じられた喜びとして、罵る声で妨害されたと信じた。そうだ。極めて無垢な喜びで敵対的に私の邪魔をする恐るべき幽霊が、その時からまさに必然的にキリストとして現れた。子どもにとって子どもの友だちが現れた。だが、彼は自らこう語った。私を信じるこれら小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる。〔「ほうがましである」と続く、マタイ福音書 18,6 新共同訳〕

かつて私の子ども時代の悟性で人間として理解されたキリストは、神として私の心に感じられ愛された。いま私の表象能力により、うまく行くようにとの教会の要求に従って神として想定され前提された神は、疎遠で無理強いする邪神として私の心が恐れ拒否し嫌悪するものとなった。

私の心から神を奪おうと脅す恐るべき幽霊から逃れてどこへ行けば良いか。私が私の天上の父にしっかりとしがみつこうとしたことは何の役に立ったか。神はじっさい、私が彼のライバル、私たち共通の敵から身を守る存在だった！ 私は、ずっと以前からと同じように喜ばしい信頼をもって、私の心の欲求を、神に、いまや私の保護さえ必要とする神に、伝えることができるだろうか。

私は、私が堅信の教に受け入れられるより前に、私の子ども時代の神を失った。そしてこの喪失は、私にとってなんと悲しい結果でなければならなかったろうか。私はいったい、ついには飽きてしまうたんなる玩具、くだらないものを神のなかで失ったのか。

私の天上の父、それどころか私の実の両親さえも、私は神のなかで失った。だが、私の良心の戒めや願望や禁令がかつて私にとって意味があり重要なものとなったのは、私がそれらにいわば神の意志の啓示を認識し始めた時からであった。私の両親、兄弟姉妹、愛する仲間、私にとってかけがえのないすべてのものを、私は神のなかで失った。私はじっさい彼らのために祈ることはもはやできず、神の慈悲の懷で静かに彼らを知ることにもはやなく、神の父なる目から守ることもない。盲目の運命の餌食として、私は彼らが犠牲にされるのを見た。

いまや失われた神の名と意志、失われた神と結びついた、神を見失った少年の心情は、いまどのような抵抗を、得ようと努力すべきあらゆる善や賞賛すべきものを、たんに空想ではなく――現実の誘惑、感性的生活の刺激に、対置するのか。

当時私が楽しんでいた堅実で人間的な学校の授業や、私の失われた神へのあこがれが、いま、最悪の感性的混乱から私を守りうる唯一の守護者となった。

堅信の授業が始まった。これが私にうまく作用し、神と私を和解させ、神に私をふたたび結びつけることになったら、神自身を父と子と聖霊という三つのペルソナに分けて私に

与える必要はなかった。それらを、私の悟性はいまでも、またこれからも、一つの本質にふたたび融合させることはありえなかった。そうなるとじっさい私の単純な悟性だけがそうした神の分解と再統一に逆らっただけではなく、私は個人的にすでに神の子に反感を抱いた。神の子を、私の心は一つねにひそかにおびえつついわば私自身の背後でだが——私の天上の父に対する敵、略奪者として告発した。それゆえ、キリスト＝神が私にとって神と和解させる者であるというなら、私はまさにキリスト＝神自身と和解しなければならなかった。だが私の内気がつねに妨げとなって、私の宗教の教師にこの欲求を正直に伝えることができなかった。教師も自分からそれを予知することはなかった。したがって、彼の授業は、三一性説を対象とする限り、一般にこの教義で修正される限り、彼の（教師の）せいではまったくなく、私の宗教的良心をひたすら混乱させるのに大いに貢献せざるをえなかった。

聖職者の話が父なる神に留まる限りでは、私はそれをどれほど敬虔な気持ちで聞いただろうか。

私の心情の夜から私の古い子ども時代の信仰の太陽がふたたびどんどん昇っていった。そして、それ自身に身をまかせてもっぱら自殺的に私の内部で荒れ狂った精神の炎が、あるいは、心の沃野を溢れつつ聖なるものと聖ならざるものがその途上で食い尽くされ世界の死の無の深淵に私を引きずり込み、あるいは、不安定な鬼火が卑俗な現実の沼地でひらひら飛ぶことができた。——その炎がふたたび集まって、沈静化された心の血管に入り、教師の唇から流れ出る油から養分を得て、静かに沸き立ち神の光源に至ることとなった。

教師は、私の内部ですでに長い間経験し深く感受してきたことを繰り返して、あるいは、私がそれを明確に意識するようにした。彼と私は手と手をとって光の聖地を歩いた。私たち二人を一つの太陽が照らした。私の目は彼の目と同じように見たが、彼の目はより鋭く熟練したものであった。彼は、自然や人間史の一群の現象のなかで私の神の痕跡を私に示すことができた。それは私が予感しなかったものだった。彼は私にとって、長く苦しい分離ののちに私を連れ戻してくれた、故郷の聖なる大地でのまったく愛すべき有益な随伴者であった。

彼は疎遠な神の疎遠な聖職者ではなかった。また、彼は、「信じよ、さもなければ呪われるであろう」という断言の壁を破壊する槌で私の心を襲う必要はなかったし、説教の雄弁という合鍵で私の心に忍び込む必要もなかった。

風琴に合わせて私の魂はいそいそと彼の演説の息に身を委ね、彼は歓声を上げて聖なる詩篇を私の魂から呼び寄せ、全的に有能で善であり賢い専制的な神を讚美した。

天使に、破壊された内的な人間をふたたび構築して、かつて私が親しんだ神の寺院に私を向かわせるのを助けた神に、私は挨拶をした。そして、自由に妨げられずに彼はこの新しい寺院のなかで聖なる職務を、一人子として生まれた神の一人子として生まれた聖職者として、司ることができた。

だが、どのような敵対的な力が、私の子どもじみた信仰の晴れた太陽を一瞬ふたたび陰気な疑いで覆い、彼の土台である寺院を揺るがせ、この犠牲の炎を主の血管から奪取し、神に浄められた感情の調和を神に対する反乱に整え、故郷の楽園を荒れた異郷に変えることができたのか。

ああ！　これが、理解不能の三一的神性についての、私にとってふたたび鳴り響く暗い言葉だった。そうだ、偶像崇拜や迷信の最も暗い国で永久に私の心をとらえ身を捧げるべきだとする、救いのない呪文のように、理解不能の三一的神性についての言葉が私のうちに鳴り響いた。私は全力でこの不気味な暗闇に抵抗した。教師は私の随伴者であることをやめ、私はもはや一歩も確実には進めなかった。

三一的神を一般に私の悟性で捉えることの困難は別として、なぜ神は、人間を聖別するために、自分から離れ落ちた罪人を自分と和解させるために、別の人格を仮定しなければならなかったのか、私にはまったく理解できなかった。

神を私はたしかに以前は、「聖なる精神」という名のもとで呼んだのではないにしても、聖なる完全な精神として知り、信じ、崇拜した。私は、神が聖なる精神であり、人間も聖なるものであるよう欲する、と信じた。モーセを通して私はたしかに神の箴言を知ってい

た。あなたたちは聖なる者となりなさい。私は聖なる者だからである。〔レビ記 20.26〕

そこで私自身、それによっていっそう良く神に気に入られたいと大いに望んだし、同様に、私の神聖性への神的援助の必要性も大いに感じた。神の善で私が確信をもって希望したのは、神自身が、私の両親や教師の口を通して、モーセと預言者の口を通して、私の心に最も差し迫って勧めるのと同じ状況で、私の弱い力がわずかしか成長せず十分ではない状況で、自分の助力を私に与えることを欲すること、それと同様に、神の全能から私が希望するのは、神が私に助力を与えることもできるということ、である。しかし、人間は神聖を欲し、自らを神聖化することができ、また人間の神聖化を実際にも働かせること――神のこの三つの特質の統一、そうだ、この三一性こそ、神が完全な全知の本質としてすでに具現している 12 歳の少年にとって、自ずから明らかとなりうるものだった。

神との和解に関して言えば、私は神を、神がしばしば不機嫌だと感じるとしても、決して和解できない本質として表象しはしなかった。私の子どもころの神は、私にとってまさに、私の実の父がそうであったより以上に、和解しえない存在だった。私との和解に傾くために神が私の心の要求に合わせて他のものとなる必要はなかった。それは、私自身が神と和解することを欲して他のものとなる必要がないのと同じである。こうして私はしばしば想像で神を恋い焦がれ、神の気に入らないことはもはや決してしまいとは望めないとしても、私は神を決して怒らせないようにと意志した。私がしばしば望んだことは、神が私の罪を忘れ、だが決して私自身を忘れ私に無関心になったり恵みを与えないことがないように、ということである。私はもちろんこれを望むために別人にならねばならなかっただろう。だが、私にとって神が恵みあるものであることを望むために、私が別人になる必要はまったくなかった。つねに恵みある神を他のもののなかに持ちたいという願望は、私の最内奥の自己に不可分の願望であり、それは必ずしもつねに私のなかで十分に力強く働いて私の行動を妨げることはなかった。その結果、神の恵みのなさが私を脅すとしても、また、私が神との和解でつねに同じ程度で私が必要とされ、あるいは、神の恵みによって私は幸せだと感じることはないとしてもそうだった。

だが、和解の儀式そのものは、神から直接出て来て私の心を満足させる神の恵みの保証への憧れと同様、しばしば行われる。また、神の和解性への信仰が同じ強さで私の心情に動き、私はしばしば、ヨブの 3 人の他の聖霊 (Tröster) とともにエホバから退けられることのなかったエリヤの言葉に元気づけられた。

人は神に嘆願し、そして神は彼を赦した。

そして、自分の顔を歎んで見つめること許し、

その人を誠実だと認めた。(ヨブ記 XXXIII, 26)

〔新共同訳 彼は神に祈って受け入れられ、歓びの叫びの内に御顔を仰ぎ、再び神はこの人を正しいと認められるであろう。〕

かの別の敬虔な歌い手を真似て真実の感情を込めてこう唱えることもできた。

あなたのしもべの魂に喜びをお与え下さい。

私の魂が慕うのは、

主よ、あなたなのです。

主よ、あなたは恵み深く、お赦しになる方、

あなたを呼ぶ者に豊かな愛しみをお与えになります。(詩篇 LXXXVI, 2)〔新共同訳〕

私は申します。「天にはとこしえに慈しみが備えられ、

あなたのまことがそこに立てられますように。」(詩篇 LXXXIX, 3)〔新共同訳〕

それから私の弱い声が、主を讃え、敬虔な歌い手に従い歓喜の声をあげることのできるすべての精神の歓喜と絡み合わせられた。

主は憐れみ深く、恵みに富み

忍耐強く、慈しみは大きい。

永久に責めることはなく

とこしえに怒り続けられることはない。

主は私たちを罪に应じてあしらわれることなく

私たちの悪に従って報いられることもない。  
天が地を超えて高いように  
慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。  
東が西から遠い程  
私たちの背きの罪を遠ざけてくださる。  
父がその子を憐れむように

主は主を畏れる人を憐れんでくださる。(詩篇 CIII, 8-13) [新共同訳]

私が直接神としばしば私の魂のなかで挙行した和解の儀式的思い出に対して、自然のあらゆる恐るべきものを伴って、18世紀以前に一度だけエルサレムのゴルゴタの丘で、恥ずべき死を無実ながら耐え、神に見放されたと感じた理解不能の神人によって、私のために、だが私ぬきに実行されたというあの別の和解の儀式的の絵画が、何というゾッとする印象を私に与えねばならなかったか！

神は、少年の意識においては、和解的な神であるだけでなく、変わらず恵みある神でもあった。少年の想像力が神を怒り熱中する神として思い描くことはめずらしくなく、また永遠に恵みある神という少年の内面の変わらぬ意識が彼の感情にとってしばしば長い期間怒った神の像によって曇らされることがありえたとしてもである。だが、この像は少年にとって醜く不快な像であった。怒る神は少年にとって恵みのない苦しむ本質であり、それによるなんらの至福も彼は自分自身だけでは望みえなかった。したがって、彼が努力したのは、こうした像を自分の魂から完全に排除するか、あるいは、病いに罹った不幸な苦しむ神を、自分の気に入った行動や仕事でいわば世話をするかのどちらかであった。そして最後に、彼の時代に、ふたたび私の意識の母胎から掠め取られたのは、永遠の恵みという表象であり、それはしだいに澄んだ至福の有頂天にさせる神の明確な像へととなった。

神と私とのかつての関係の思い出は、堅信の授業の過程で話が人間の自然的腐敗や神の怒りに触れたときつねに極めて生き活きと蘇った。恵みから自ずと私のなかに惹起される、キリストの血という和解的力への信仰によってのみ、神は私と和解しうるであろう。

キリストは、かつてはもっぱら私の感情のなかで、また必ずしもいつもではないがいまのところは怒り苦しむ者であつた。彼は、怒り恵みなく苦しむものとして厳粛に説明された。彼の怒りは、もはや私の側からの誘惑に至る唯一の犯行ではなかった。私の全自然、私の人間的自然がそのものとしていまや彼の怒りの根拠であり、また、神の和解化はもはや、いわば彼自身の自然に、彼自身の善き意志に依存せず、また私の仕事への奉仕や彼の和解性への私の直接的な信仰に依存していなかった。第三者の力と指令に委ねられるのを私は見た。しかも、私の表象のなかで神に敵対し私の心情が否認した第三者に。

神における不信、私自身における不信、そしてキリストに対する反感の高まり、これは、キリスト＝神というかの説について長く私に留まった印象であった。

父なる神についての説は、神と私を和解させるのに私にはすでに十分であった。それゆえ、キリストの血がもつ和解する力は、私の注意を、怒り熱中する神に釘付けにするのにもっぱら適していたが、恵みある神から私を引き離し、したがって、私の唯一の神を壊し、二度目に奪い去るのに適していた。

三一的の神への、とりわけキリストの血という和解する力への信仰を公言するという条件のもとで、私がキリスト教福音教団に受け入れられる日が近づいた。おそれおののきつつ私はその日を待ち受けた。

だがこれに反して、私はじっさいすでに、これらの教説が一般に私にとって不可解なものを含むがゆえに、それを復唱することに抵抗した。この抵抗は、学校の授業と堅信の授業の諸要求をしかるべく区分することが私にはできないことにそのまったく自然な根拠を持っていた。不可解なことを信じるのが私にとって最も神聖な義務だとする堅信の授業に行かせられる数年前から、私は学校に通っていた。学校では、私が授業を完全に理解し捉えた証拠を見せたときにだけ賞賛された。学校では、私が何か不可解なことを唱えたと教師が気づくや否や教師に叱られるのがつねだった。そのことによって私は、自分が悟性で完全に捉えたものだけを告白するのに慣れ、また、私がじっさい学校の不安のなかで何か反対のものに誘惑されると、そのすぐあとに、私が教師に嘘をつき騙したかのような

と、教師から極めて激しく非難された。

それでは、私がかの教説から断片的に理解し得たことは、たいていはまた私の心の経験と欲求と鋭く矛盾することはなかったのか。

堅信の日が来た。外面的に極めて美しく飾られ、心のなかでは悲嘆と絶望をもって、盛大に飾られた寺院に私は入った。ふるえる唇で私は、求められて「はい」と答えた。だが、それは私にとって、「はい、私がやりました」という以外の意味を持たなかった。拷問台に引き上げられた人が、自分が関与していない犯行を告白するときのそれだった。そして、何という恐るべき感情をもって私は祭壇に近づいたことか。その祭壇で私は、自分がキリストと、人間として自由意志で自分の命を私の魂の救いのために犠牲にした神と一体化された。その一方で私自身彼のために殺された犠牲として現れた。何という犯罪者の不安をもって私は、パンとぶどう酒が私の罪の赦しとされる祭壇に近づいたことか。その瞬間、自分が神を恐れぬ行動をするのではないかと心配した。私の心が否定する神へのかしこばった献身によって、私の心がとても愛し慈しむ神のかしこまった否定によってである。というのも、私はじっさい彼を、私の子ども時代の神を、私が堅信の授業に出る前からすでに失い、再び発見し、そしてこの授業のなかでふたたび失ったからである。だが、私は、この時間まではまだ神を否定したことはなかった。私の心の唯一の神への私の忠心、一途で憧れに満ちた私の愛を、私は彼に対して一度も否認したことはなかった。依然として切なる期待をもって私はこれまで彼を渴望してきた。そして、数えきれない回数、神聖な涙のもとで跪いて私は彼に呼びかけ、彼が最後に私の疑念の夜を霽らして、真実の唯一統一的な神として私に現れるのではないだろうか。

どれほど困難であっても、そうだ、私は告白しなければならない。私の堅信の日は、私にとって、私がこれまで体験したなかで最も不幸な日であった、と。

「罪と審判と劫罰の日」、このゾッとする特徴をもってこの日は何年も記録され、私の心の血をもって私の命の日記に記された。そして、数年後になお彼のことを考えたとき、私はどれぐらい頻繁に、ヨブが自分の生まれた日について語ったかの言葉を、感じ語ろうと思ひ試みるだろうか。

その日は闇となれ！

いかなる恵みも上からその日を祝うことなく

光もこれを輝かすな。〔ヨブ記 III, 4 新共同訳〕

#### 【訳者コメント】

私自身キリスト教徒ではなく、厳しい信仰体験がないせいもあり、文意がつかみにくい。要するに、著者にとって神は父なる存在であり善行の鑑であって、神が人間との和解のために子キリストと聖霊となって現れること、つまり神の三一性は欺瞞としか思われないうことか。こうした解釈はユニテリアンに近いが、兄ルートヴィヒの影響を受けてキリスト教を批判するならば、父なる神の唯一性を固持するよりも、キリストの神聖性を否定しイエスをただの人間と見るほうに力点を置くべきではないかと思われるが、どうか。

---

事務局から

\*本紙は季刊発行です（次号6月）。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。

\*年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フォイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山5丁目28-20

東洋大学社会学部柴田研究室気付

フォイエルバッハの会

tamast@toyo.jp

<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>